

郷土話方資料(4)

— 今から七十年前 昭和七年十二月十日

佐伯尋常高等小学校

紹介者 山本 保

(会員 佐伯市池船町)



登りました。

此の城山は、慶長六年、今から四百年前の豊臣氏の時代に、毛利高政公が、日田からお出でに成り、ついで、徳川家康の慶長十一年、城を築かれた所で、其の城は、明治維新頃迄、残って居たさうです。

先年出来た、此の毛利神社には、初代の高政公と八代の高標公とをお祭りしてあるのです。

こんな話を聞きながら、落葉をふんで、歩いて居ますと、何時しか、町が一目に見下せる所に、来ました。

先生は、側の石に腰をおろして、有益な郷土の史蹟について、語り始めました。

「さあ皆さん。広小路の所を見て下さい。あれは諸木橋でせう。

昔、諸木奉行と云ふものが、あつたさうです。八代の殿様・高標公が、産業をしようれするために、置いてあつた役所です。それで、諸木橋と言うわけが、分つたでせう。」

(四) 城山から
此間の日曜日に、日和が好かったので、先生と城山へ

吉橋で、あの大きい屋根が魚市場です。

昔、あの付近を六本松と云つて、罪人の仕置場だった
そうです。悪い事をした人は、皆、あそこでおしをきを
うけたわけです。

將軍家光の時代に、キリスト教を信じる事を禁じた事
があるでせう。

それでも、こつそり信ずる者があるので、捕へて火あ
ぶりにしたのも、あそこです。」

「六本松の話は、それ位にして、次に関所であつた所
を知らせませう。少し見えにくいのが、杉谷のコクウゾウ
様の付近にあつたのです。

活動で見る様な、チョンマゲをゆひ、刀を差した武士
が、一々通行人を取調べたのです。」

「こんどは、毎年、春の遠足にはかがさずに行った、
あの御浜御殿、今は、飛行場になつたので、神様は女島
山に移し、ただ大きな松の木が、あるばかりです。

文久三年、砲台が築かれたそうです。」

「女島の向ふ側に、枝ぶりの長い松のある鼻が、みえ
るでせう。あそこは、鼻面といつて、関所があつたので
す。」

「皆さんは、伊能忠敬と云ふ人を、知っているでしょ
う。あの人が、海岸測量の時に、あの鼻面に来て、景色
の良いのに驚き、天下に比なき景色だと、賞めたそうで
す。」

「こんどは、ずつとこちらにもどつて、明神様に行き
ませう。

加茂、春日、住吉、梅の宮、稲荷の五所を、氏神とし
てお祭りしてある。

あの神社は、第五十一代の平城天皇の大同元年につく
られた。今の天子様が、第百二十四代ですから、随分、
古い神様です。

あのすぐ、こちらの招魂場、木立の間に所々、墓が見
えるでせう。

西南の役の際、佐伯辺で戦がありました。青山の黒
沢、川原木の仁田原では、激しい戦がありました。その
時の戦死者を祭つてあるのです。」

「最後に、養賢寺の事を話して、終る事に致しましよ
う。」

此のお寺は、九州屈指の名刹で、慶長十一年にできたそうです。

弘法大師の作と云はれる、お地藏様があります。

よその人は、あまり立派なお寺だから、佐伯に似合わぬ養賢寺はと、言います。」

いつの間にか、日が西にかたむいて、少し寒くなりました。

私たちは、何かしら、うれしい気持ちになって、城山をおりました。

地名のルーツ

◆古市

佐伯市より西へ約四峠、佐伯氏の旧城址である梅牟礼山の東麓の部落。部落は梅牟礼山の支脈の南端から、北へ伸びる嘴状の丘陵地と、脇部落北側丘陵の南へ突出する部分との間にある。門前部落から南下する小川が東へ向きを変え、この部落の北部を横切っている。

この小川より南はあたかも盛土をしたように、水田面より一〜二畝高く、東および西はそれぞれ灌漑用水路をもって、隣接字に境している。水路の内側は石垣を築い

て土砂の崩壊を防いでいる。字図によると、ほぼ北に走る道路に沿って、商家のそれを思わせる細い短冊型の屋敷地が整然と並んでいる。三二の宅地を数えることができるが、現在は半数の一〇数戸しかない。

部落の中を縦貫する道路は、五〇年ぐらい前に約一畝両側へ幅を上げたので、字図に見える水路はほとんど何らの役割も果たしえない現状。以上のように字図および現状からみて、この部落はかなり衰退著しいが、古い市場集落の名残りをとどめている(中略)。

古市は城下町と考えるよりは、市場集落として建設されたと見るべきである。しかし、古市に市が立つようになった原因は、当時舟がこの付近まで遡航可能であったことと、城の麓に位置したことが大きく関係している。

市の開始は不明だが、大永七年梅牟礼落城とともに浪入した武士や、天正六年耳川に戦死した武士の中に、古市姓のものが見えるので、室町中期ごろにさかのぼるかも知れない。市の状況などは資料がないので不明。部落にはヤクモト(庄屋?)屋敷の址ばかり残っていて、子孫は他へ転住したとしても、江戸時代には市は開かれなかったから資料はない。室町時代末期に、既に古市と呼ばれ、江戸時代に入ると、現佐伯市が城下町となったため、この地に市が開かれる可能性は非常に薄くなるからである。しかも毛利氏は城下町建設にあたって、古市を古市町へ移転せしめたようである。